

## 20年以上の歴史を持つアジア最大級のアートフェア

会場である台北世界貿易中心(ワールド・トレード・センター)は、観光地としても有名な高層ビル「台北101」に隣接している。



ART TAIPEI (以下、アート台北)は、歴史が古いだけでなく、その規模においてもアジア有数のアートフェアだと言えるだろう。2016年の開催では、VIPプレビューも含めた5日間の会期中に3万人を超える来場者が訪れている。

第一回目のアート台北が開催されたのは、1992年のこと。東の画廊の董事長(社長)である劉煥獻氏

らが中心となって創設された中華民国画廊協會の主導で、「Taipei Art Fair (台北アートフェア)」というイベントが新設された。ほぼ同じ頃に誕生した現在の「アートフェア東京」の前身である「NICAF (Nippon International Contemporary Art Fair)」と同じく、台北アートフェアは、アジアでおこなわれたアートフェアの先駆けだと言える。その後、1997年のアジア通貨危機によってアジア各国で登場したアートフェアの多くが中止を余儀なくされた。しかし、台北アートフェアはその波を乗り越えて存続。2005年にはアート台北と名前を変えるところにも、その中身も現代美術、特にアジアの若手アーティストのものが中心となって今日に至る。

2016年11月12日〜15日の4日間の日程で開催された23回目の



巨大な看板が、イベント自体の大きさを暗示しているかのようだ。

アート台北2016。今回はアジアを中心に150軒を超える画廊が参加した。うち55軒が初出展で、これはアート台北の歴史の中で最高の数字だ。過去に出展経験のある海外画廊は62軒に上った。海外からの出展画廊の内訳は、欧米11軒、韓

台湾で最大のアートイベントだけに、いかにもアーティスト然としたファッションの人たちも集まっていた。



国10軒、中国及び香港19軒、東南アジア11軒である。日本からは台湾を除いて最大の32軒が参加。日動画廊、ギャラリーためなが、至峰堂画廊、彩鳳堂画廊、新生堂、秋華洞、ギャラリー椿、Röntgenwerke

AG、TEZUKAWAMA GALLERY、GALLERY 小暮、YOD Gallery、ホワイトストーンギャラリーなど錚々たる顔ぶれが並んだ。

開催前日の11月11日には、有力コレクターを対象にしたVIPプレビューがおこなわれた。11月6日まで「アートフェア上海」が開催されていたこともあって、出足は今ひとつだったようだが、さすがはアジアを代表するアートイベント。台湾を中心に各国のアート関係者が一堂に会し、多くのマスコミが押し掛けた会場は華やかな雰囲気包まれていた。ヴェルニサージュで振る舞われたシャンパンのせい、それとも会場の台北世界貿易中心を埋め尽くす素晴らしいアート作品のせいかわからないが、VIPたちの上気したように赤くなった頬が非常に印象的に見えた。

翌12日からは一般の美術ファンも来場できるようになったためか、前



日のVIPプレビューではあまり見かけることのない学生たちの姿も目立つ。また20代と思われる若者でも10万円、20万円ほどの作品を購入しており、ここ台湾では、老若男女を問わずアートに対する関心度が高いことをあらためて感じた。